様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３１３０２
研究種目：若手研究
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１２８８６

研究課題名（和文）サンタ・カーザと「ロレートの崇敬」を巡る図像の変遷－無原罪の御宿りを中心に－

研究課題名（英文）Santa Casa and Its Iconographical Changes related to the Loretan Veneration: Focusing on the Immaculate Conception

研究代表者
渡邊　有美（Watanabe, Yumi）

東北学院大学・文学部・講師

研究者番号：５０８９８４３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　最大の研究成果は、最終年度に教皇庁と巡礼についての研究を論文として発表し、またイタリアの聖所よりも先に聖なる家の複製が存在した英国のウォルシンガムを訪れ、実見調査をしたことが挙げられる。同地では市場にはほぼ流通していない資料を入手することができた。
　継続成果としては、「ロレートの聖母」関連図像のデータベースの構築が挙げられる。東京文化財研究所、東大の象形文化研究拠点等で培ったFileMakerを用いたOPAC構築の経験を活かし、図版も含めたデータベースの入力作業を進めている。全体の成果としては、「ロレートの聖母」と「受胎告知」図像との関連性、無原罪の御宿りとの関連性を提示したことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　一大巡礼地のロレートの「聖なる家」の存在は、広く一般的に知られてきた。しかしその崇敬に密接に関連した図像の研究は、キリスト教における最大の神秘の一つである「受胎告知」の図像との観点からは行われてこなかった。本研究はこの点に着目し、研究成果を複数の論文として提示したことに学術的意義がある。また、図像が崇敬に影響を受け変化したことを示し、イメージの持つ力を明らかにした点に社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：　One of my achievements this year is the publication of an article on the Franciscans and the Papacy, “Santa Casa and Pilgrimage: Its relationship with the Papacy and the Franciscans”. Also, my article on the Annunciation and Santa Casa has been accepted by an Italian journal. But my biggest accomplishment has been an actual visit to the shrine of Walsingham in Norfolk, England, to gather necessary information for the research.
　An ongoing project is the construction of a database on the “Madonna of Loreto,” using FileMaker software, utilizing my experience in building an OPAC at Tokyo National Research Institute of Cultural Properties, and the COE office of the University of Tokyo. I hope to finish this database with a next possible grant, using a part-time worker for information gathering and data entry. The articles on the Madonna of Loreto and the Annunciation, and their relationship to the Immaculate Conception have been other achievements.

研究分野：初期ルネサンス

キーワード：ロレートの崇敬　サンタ・カーザ（聖なる家）　聖母崇敬　無原罪の御宿り　受胎告知　ウォルシンガム　巡礼

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

この研究発端は、博士論文「フィリッポ・リッピ スポレート大聖堂内陣壁画―図像プログラムとパトロネージ―」において、マリア伝の最初の物語として描かれた《受胎告知》（1466-69）を検討する中で、同壁画（1466-69）の「聖なる家」（サンタ・カーザ）の特異な描写に着目したことである。とりわけその特徴的な「一戸建て」としての描写や、「三方の壁」、「格子窓」などのモティーフに注目し、図像学的観点からの研究として発展させたものが本研究である。そして図像解釈学的観点の導入も意図した。すなわち、マルケ地方に存在していたロレートの「聖なる家」の崇敬がスポレート大聖堂の壁画にも影響を与えたのではないかという疑問から研究が開始された。この際、同内陣壁画の《聖母の戴冠》は、無原罪の御宿りの教義と密接に関連していたことが明らかになった。

加えて、ロレートの「聖なる家」に関連する連祷である「ロレートの連祷」には、無原罪の御宿りとかかわる単語が見受けられることから、同崇敬（当時はまだ信心）とのつながりを推測した。とりわけ、無原罪の御宿りと祈りとの関連性については、この崇敬を典礼に導入した教皇シクストゥス 4 世の祈りに顕著であることも研究に着手するきっかけとなった。

２．研究の目的

これまでロレートの「聖なる家」については、主に信憑性を問う研究が主流であり、図像に関する研究は行われ、ある程度の図像の分類はされてきたものの、従来の「聖なる家」関連図像の分類には含まれていない図像も存在する。そこで本研究では、複数の図像が存在するこの「聖なる家」に関連する図像を取り上げ、その図像を精査することで、多重の信仰（崇敬）が互いにかかわり合いながら形成されたと考えられるところの、仮に「ロレートの崇敬」と呼ぶ崇敬と図像との関係性を明らかにすることを目的とする。同時に、「ロレートの崇敬」の普及には、図像が貢献していたことを提示し、さらにフランチェスコ会が推進していた無原罪の御宿りと「ロレートの崇敬」のかかわりを明らかにする。

具体的には、スポレート大聖堂内陣に描かれた《受胎告知》壁画にまず着目し、「ロレートの崇敬」が同主題の図像に与えた影響を検討する。この背景には、近年、クローゲルが指摘した「受胎告知」と無原罪の御宿りとのかかわりが挙げられる。すなわち、「ロレートの崇敬」を用いてフランチェスコ会が未だ教義として承認されていなかった無原罪の御宿りを推進した可能性を指摘する。同時代の「受胎告知」作品に前述の「三方の壁」の表現、「格子窓」などのモティーフが見られるもの、或いは、「ロレートの聖母」の図像として知られている天蓋表現と柱を持つ天使が存在する類似作品においては、「ロレートの崇敬」との関連性がうかがえるためである。さらに、図像のみならず「ロレートの連祷」として普及した祈りが「無原罪の御宿り」の普及の一助となった可能性をも探る。イメージ（図像）と祈り（テキスト）が相乗効果を発揮していたと考えられるためである。

さらに、イタリアのロレートに 13 世紀末に到着した「聖なる家」よりも 1 世紀以上も前にすでにイングランドのウォルシンガムには、「聖なる家」のレプリカが存在した。この聖所がイタリアの聖所に与えた影響をも探る。

３．研究の方法

最初に、「ロレートの連祷」として知られる祈りと無原罪の御宿りとの関連性について、とりわけその連祷が拡散した 16 世紀以降の図像を中心に検討を行う。その上で、「ロレートの連祷」以前に讃美として存在していたマリア崇敬との関係に焦点を当て、これらがいかに図像に反映されているかの調査を行う。

続いて、「ロレートの聖母」関連図像に分類されてこなかった作品として、一部の特異な「受胎告知」図像を取り上げ、調査・検討する。それらの「受胎告知」図像には、「ロレートの崇敬」における無原罪の御宿りの要素が部分的に取り込まれている作品も存在し、意味内容上の繋がりが想定される。同主題の中でもとりわけロレートの「聖なる家」の特徴を持つ表現が存在する作品、さらに「ロレートの聖母子」図像に何らかの形で関連性がある作品を検討する。その上で「ロレートの崇敬」とのかかわりを、地域的・時代的要素から精査し、影響関係を提示する。

さらに、教皇庁が度々、「聖なる家」を管理下に置くために介入していた事実を元に、教皇庁のこの巨大な聖遺物に関する関心を、政治的・宗教的な文脈を中心に紐解く。特に図像との関連性から、無原罪の御宿りを推奨していたフランチェスコ会出身の教皇であるシクストゥス 4 世を中心にその背景を読み解く。

最後に、イタリアのマルケ地方ロレートに「聖なる家」が「運ばれた」背景には、これ以前にイングランドのウォルシンガムに存在していたこの聖遺物のレプリカが関係しているのかどうかを、歴史的資料や絵画史料などをもとに検討を行う。また、これら全ての調査の基盤となるデータベースの構築を継続して行う。

４．研究成果

「ロレートの連祷」と無原罪の御宿りに関連する図像に関しては、コロナ感染症下であったため、主に文献の読み進めを行い、とりわけ「連祷」という形の祈りに着目し、マリアへの連祷が「ロレートの連祷」として普及したことを提示した。この上で同連祷が、「ロレートの崇敬」にかかわる「ロレートの崇敬」とどのように関連しているかを主に 16 世紀以降のキャンバス画や銅版画において確認した。また、これらの作品に描かれたモティーフの中にはマリアの無原罪性と結つく図像が存在するため、このような図像が誕生した背景には、多くの巡礼者を惹きつけていたロレートの「聖なる家」に関連する崇敬をフランチェスコ会が無原罪の御宿りの崇敬を推進するために用いていた可能性を指摘した（研究成果①）。

フランチェスコ会が主な基盤として活躍していたウンブリア地方には、スポレート大聖堂内に無原罪の御宿りを示唆するマリア伝の壁画が展開されている。この背景には、同聖堂の司教で枢機卿でもあったベラルド・エロリの存在がある。このことを再確認することで、受胎告知が実際に起きた場所として信じられてきた「聖なる家」と受胎告知とのつながりを確認した（研究成果②）。また、同内陣壁画と典礼との関係性の確認を行なった（研究成果⑤）

この上で、無原罪の御宿りを示唆した主題として用いられてきたと近年指摘された「受胎告知」作品の中でも、「ロレートの崇敬」とのかかわりが指摘できる作品を提示した。前述した「聖なる家」の建築的要素として知られているモティーフと「ロレートの聖母子」との関連性が見られる作品を、制作場所や画家とのつながりをも含めて論じ提案した（研究成果③）。

これらの背景には、フランチェスコ会から二人目の教皇として着任したシクストゥス 4 世ら教皇と「聖なる家」との関係性があることを、教皇庁とフランチェスコ会との結びつきから、巡礼地としてのロレートの存在を指摘し、背景には政治的・防衛的な拠点としてのロレートの立地条件に加え、聖遺物としての「聖なる家」の存在があったことを示した（研究成果④）。

そしてまだ研究途上ではあるが、イタリアより先にこの「聖なる家」のレプリカが存在していたウォルシンガムの存在が、イングランドおよびイタリアにおけるマリア崇敬の推進につながっていたことを今後、論文等の形で発表予定である。

【雑誌論文】

① 「ロレートの連祷と無原罪の御宿り」『キリスト教文化研究所紀要』東北学院大学、40 号、2022 年、19-40 頁。
② “Filippo Lippi’s Frescoes at Spoleto, Cardinal Eroli, and the Immaculate Conception,” *Mitteilungen des Kunsthistorischen Institutes in Florenz*, LXIV. Band, Heft 2, 2022, pp. 221-230（査読有）.
③ （論文印刷中）“The Annunciation and the Cult of Santa Casa in Loreto,” *Iconographica*, 2024（査読有）.
④ 「『聖なる家』（サンタ・カーザ）と巡礼―教皇庁とフランチェスコ会との関係から―」『ヨーロッパ文化史研究』 東北学院大学、25 号、2024 年、73-90 頁（査読有）。
⑤ 「スポレート大聖堂と典礼―図像における音楽表現と銘文―」『宗教音楽研究所 紀要』 東北学院大学、27 号、2023 年、1-10 頁。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Yumi Watanabe	４．巻 LXIV
２．論文標題 Filippo Lippi’s Frescoes at Spoleto, Cardinal Eroli, and the Immaculate Conception	５．発行年 2022年
３．雑誌名 MITTEILUNGEN DES KUNSTHISTORISCHEN INSTITUTES IN FLORENZ	６．最初と最後の頁 221-230
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 渡辺有美	４．巻 40
２．論文標題 「ロレートの連祷」と「無原罪の御宿り」――図像との関連性――	５．発行年 2022年
３．雑誌名 キリスト教文化研究所紀要	６．最初と最後の頁 19-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 渡辺有美	４．巻 27
２．論文標題 「スポレート大聖堂と典礼――図像における音楽表現と銘文――」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東北学院大学 宗教音楽研究所 紀要	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 渡辺有美	４．巻 25
２．論文標題 「『聖なる家（サンタ・カーザ）』と巡礼――教皇庁とフランチェスコ会との関係から――」	５．発行年 2024年
３．雑誌名 ヨーロッパ文化史研究	６．最初と最後の頁 73-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yumi Watanabe	４．巻 -
２．論文標題 “The Annunciation and the Cult of Santa Casa in Loreto”	５．発行年 2024年
３．雑誌名 Iconographica	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 Yumi Watanabe
２．発表標題 “Mary in Japan: The History of Art Perspective”
３．学会等名 PAMI（Maria tra teologie e culture oggi. Modelli, comunicazioni, prospettive; 10th Sep., 2021）
４．発表年 2021年

１．発表者名 渡邊有美
２．発表標題 「フィリッポ・リッピとスポレート大聖堂内陣壁画ーマリア伝に込められた意味ー」
３．学会等名 東北学院大学　ヨーロッパ文化総合研究所　公開講演会（2022年10月22日）
４．発表年 2022年

１．発表者名 渡邊有美
２．発表標題 「マリア崇敬ーロレートの『聖なる家』と『受胎告知』を中心にー」
３．学会等名 東北学院大学　文学部総合人文学科　公開講座（2023年7月15日）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関